



©阿部和史

hizuka Honma

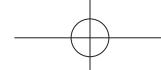
# 本間 静香

## — PROFILE —

### バイラオーラ

フラメンコ舞踊家の本間三郎と本間牧子の長女として誕生したものの、フラメンコを始めたのは20歳を過ぎてから。2007年より約2年間、スペイン・グラナダに留学。2010年、日本フラメンコ協会新人公演にて奨励賞受賞。都内にて本間牧子と共に本間フラメンコ舞踊研究所主宰の傍ら東京近郊、盛岡でも講師活動中。随時ライブ出演中。

聴き手／小山雄二(本誌編集長) 撮影／小倉泉弥、阿部和史  
texto por Yuji Koyama foto por Senya Ogura y Kazubumi Abe



「華奢なカラダ、なのに、強靭な体幹とサバテアードでグイグイくる。観客を捕らえて離さない瑞々しい眼差しも、もし触れたなら、この手に光輝くオーラを与えられるような白い胸元も。しかし、触れた手はみるみる石に変えられるのだ。妖しく美しく、満月の光を浴びた白い椿。絹みたいな磁器みたいなうっとりする胸元。あんなドレスを着て踊ってイイのは何人もいない。併まいに品格があって物語がある人だけ。ズキンと胸打たれたのでした」というあまりにもドンピシャな描写はベテランライター関範子の本音。昨年当シリーズに初登場した本間静香は、熱くスリリングな完全燃焼スタイルで「また観たいっ！」という願いを来場者の胸に刻み込んだ。あれから一年、その期待を数倍にも增幅させた成果を彼女はこのステージにぶつけてきた。そこまでやるのかっ！という過激さで完全燃焼する、ゾクリこの世のものとも想えぬ美しさ。わずかな期間にこれだけ本格成長を遂げた例を私は知らない。まさにこのシリーズ屈指と云い切

れるトータル内容で、驚くべきことにすでに彼女は魅せる踊り手トップクラスの仲間入りを果たしている。「初めて見る景色にたどり着けるでしょうか」と彼女はプログラムに記したが、当夜の観衆すべてが実際にたどり着けたことの生き証人となった。曲はタラント、ペテネーラ～シギリージャ、アレグリアスで、世界観・色彩感の踊り分けも克明。静と動のあらゆる瞬間が観どころとなっており、フラメンコの野生と優美、粹と艶とが混然一体となって、エロスとタナトスのうねりを巻き起こす。プレない体幹の大膽な動きは細部に至るまでウソがない。そこが急成長の最大の理由かもしれない。余談だがいま日本で『カルメン』を踊るなら、それはこの人だ。次回出演は未定だが、本間静香の次なる動機の昂まりをじっくり待ちたい。とりあえず静香のステージは観るべし！ そう広言できることがうれしい。（小山雄二）

（パセオフラメンコライヴVol.54／本間静香ソロライヴ 2017年5月11日(木)東京(高円寺)エスペランサ／本誌2017年8月号『公演忘備録』より）



©小倉泉弥

# 「切れれば 血しぶき 飛ぶような」

2010年日本フラメンコ協会・新人公演の奨励賞受賞でいよいよ頭角を現わし始めた本間静香だが、注目すべきはむしろその後の加速するかのような躍進ぶりだ。2016年の一回目のパセオライヴ出演依頼はある種バクチだったが、予想通り彼女は観客席の心をぐぐっとつかんだ。そして再度登場の模様が冒頭の忘備録である。その急成長の裏側にあったであろう何かに強烈な関心を抱いた私はその謎解きに迫る。四

度目の編集長復帰を自ら記念し、残り少ない人生に貴重な糧を得ようとするリハビリ対談である。

てなわけで、十年前にはめちゃめちゃへタクソだった静香さん、全編ぶっちゃけ本音でお願いします。

「いやー、二度目のパセオライヴの動画を見ましたら、隙だらけで、あーあって目を覆いたくなりました。まだまだへたくそな分、私にはまだまだ延

びしろがある模様です！（笑）」

「ぶっ、たいへん前向きですね。ところで、ジャックナイフのような冴えた切れ味だった最初のパセオライヴは本人的にどんな感じだったの？」

「休憩なし70分で全てを出しきるソロライヴ、初めての経験ですし、やってみないとわからないことだらけ。全力投球しか特技が無いもので、加減せず全力でスタート切って、それで最後の方なんて苦しくて苦しくて極限の状



©阿部和史

態で、気力だけで何とかラストまでたどり着いた感じでした」

ふーん、客席からは分からないもんなんだな、最後まで沈着冷静に見えたよ。本間三郎師匠のオメナへで踊った静香を観て初回依頼を決めたんだけど、その初回の完全燃焼を観て、鉄は熱いうちに打てって、その場で次回をお願いしたんだよ。

「お話を頂いて、ありがたくて嬉しくて光栄に思う反面、正直またあんなに苦しいことをやらなきゃいけないのかっていう気持ちの方が強かったです」

「そうだったのか。で、それはどんな質の苦しみなのかな？」

「私はスポーツ、そしてスポーツ選手を観ることが大好きですが、例えばオリンピック。四年に一度のその時その瞬間にベストコンディションを持っていくために、すべてを懸けて日々生きていくわけですけど、それって本当に

本当に凄いことだと思います」

「ああ、なるほど、その部分に反応するんだね。」

「はい。個人のピークのタイミングとオリンピックの開催時期は違って当然なのに、決められた日時に自分のピークを合わせるための努力を毎日積み重ねていきますよね」

「しかもたった10秒で終わってしまう競技もある。」

「それに比べたら大変小規模で恐縮ですが、私も私なりに2017年5月11日20時開演のパセオライヴに、自分のコンディションをベストに持っていきたい！と思ったんです」

「光栄なことです。で、君の日常生活は、具体的にはどんなふうに変わっていくんだろう？」

「フラメンコや踊り以前に、自分の“体自身”と向き合う意識がより強くなりました。自分の体の現状をしっかりと見

つめて、まずは体力・筋肉だと、水泳やったり筋トレやったり、一時頑張ってみました、長続きしなかったんですけど、そんな中今でも続けてるのがヨガと朝のストレッチです」

特にヨガを厳選・優先した理由って何だろう？

「フラメンコと共に通なところ、正反対のところ、毎回発見があって面白いです。体の使い方、向き合い方に対する意識や裾野が広がりました」

なるほど、まずは肉体面の強化、そして精神面の強化。さらには？

「さっきのオリンピックの話に戻りますが、本番当日のコンディションの重要性です。朝起きてこんな状態だったらいいな、反対にこんな状態だったらまずいな、とか」

それもコントロール出来たんだ？

「いえ、これはなかなか難しくて。体のコンディションって、微々たることで刻一刻と変化します。具体的にどうしたらいいのか掴めそうで掴めないまま試行錯誤して、結局わからず仕舞いで、あとは祈ることしか出来ませんでした」

はあ～、そりや難問だもんなあ。

「専任コーチが欲しいです！（笑）そして最後の作戦は“充分な睡眠”でした。本番の前々日、前日と自分なりにも体をケアして、10時間近く熟睡しました。過酷なプログラムなのでリハは軽め、体力温存のつもりでしたが、結局最後まで通してしまいました」

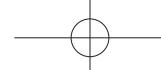
「ああ、ハードにガンガンやってたね（笑）で、本番の本人的感触は？」

「初回のパセオライヴは途中で限界を超えてしましたが、二度目は100ある力を100使い切る限界、その紙一重のところでちょうど終えることが出来たような感覚です。苦しいのは同じなんですね（笑）」

二度にわたる苦行の成果は？

「自分の体をより知ること、心と向き合うこと、そしてその心と体をより近づけること、その手段を探すこと、本番は心と体をひとつにすること……いろいろありました」

協演者の存在もかなり大きかったんじゃないかな？



©小倉泉弥

「なんといっても徳永健太郎くんのギターですね。一番好きなところはスピード感凄いのに絶妙のコントロールが効いてるところ、限界ギリギリまで責められるところです。猛スピードで自由自在にボーダレスで空飛んでるイメージですね」

二回とも健ちゃんだったね。

「はい。さらに二回目は音楽監督として音作りを全てお任せで。彼のギターは自分の持っている力丸ごと全部、時にそれ以上を引き出してくれます。自分は沸点に到達することは出来ても、まだその過程をコントロール出来ないんです、そんな至らないところ諸々を、健太郎くん、カンテの川島桂子さん、パーカッションの容昌さん、パルマの吉田光一さん、皆さんに寄り添って支えてくれました。強力なサポートがあったからこそ、全身全霊で挑むことが出来ました」

で、肝心の「初めて見る景色」にたどり着くことは出来たの？

「向かい合った結果浮き彫りになった自分自身とは、つまり、嘘なく踊りたい、正直に生きたいってことなのかなって、今は思います」

うーむ、だんだんと静香の発言が二度のパセオライブの内容とリンクしてきた。何せ君を初めて見掛けたのはまだ中学生の頃だったし、こんな話するのも初めてだもんなあ。エンジンかかってたみたいだから、今現在の静香の状態をありのままに、存分に話してみてくれないか。

「ありのまま、ですか？……そうですね、心わしづかみにされる時、熱いものが込み上げる時、体全身に衝撃が走る感覚動感の正体は一体何だろうと思った時、それは昨日今日じゃ決して作れない、人の思いや景色に触れた時なのかな、なんて思うことがあります。

フランメンコに限らず、世界中のたくさんの芸術、文化、伝統、スポーツ、人類の歴史や生命、大自然。地球上にはこんなにも心動かされるものに溢れていて、生きている限り私はそれを一つでも多く知りたいし触れたいし感じたいです。肌で感じる度、一番大事なことって皆同じでシンプルなんだ、フランメンコも一緒なんだと毎回気付かされます。

好奇心の矛先をフランメンコだけに絞れたら、もっと早くうまくなつてもつ

と早く前に進めるんでしょうけど、どうも速効性のない生き方なのは自覚しています。長い長い道のりです。この調子じゃ道半ばで寿命です。でも今のところこんな風にしか生きれなくて(笑)その代わり揺るぎない何かを手にしようとしている最中なのかもしれません。

絵画や音楽等の作品は100年先の人にも届けられるけど、肉体も踊りもその瞬間にしか届けられません。でも“その瞬間”にその人の思いや歴史の積み重ねも、必ず隠しきれず滲み出るものだと思います。だから、よく生きたいです。切られたら鮮やかに血しぶき飛ぶような、いつもそんな心の状態でありたいです。

落ち込んだり行き詰まったり自信無くしたり、時に血も涙も流れながらも、その気持ちだけはブレないみたいです。それを積み重ねながら生きて、結果的に、自分が感動した分だけ誰かに何かを届けられるかもしれません。誰かとより繋がれるかもしれません。共鳴して共有して、その瞬間が一番幸せなのかもしれないなー、それが本望なのかな、と思ったりします」